

称号及び氏名	博士（保健学）	今西 美由紀
学位授与の日付	平成29年9月25日	
論文名	在宅ケアサービスを利用する高齢者の QOL に関する研究 The Study for the QOL of Elderly Persons Using a Home Care Service	
論文審査委員	主査	日垣 一男
	副査	稲富 宏之
	副査	内藤 泰男

論文要旨

はじめに

近年、本邦では急速な高齢化が進み、介護や医療の現場では、「施設から在宅へ」というスローガンのもと、病院や施設主導型から地域や在宅主導型のケアへの転換が進んでいる。

内閣府の調べによると、自分自身が要介護状態となったとき、介護を受ける場所として「自宅」を望む人が、男性で約4割、女性で約3割存在することが明らかになっている。費用対効果の面からみても、ケアの在宅主導型への転換は望ましい。しかし、在宅主導型のケアへの移行が進んでも、「ケアの質」そのものが低下しては本末転倒である。高齢者にケアを提供する側の人間は、高齢者自身の生命や人生、生活の質(Quality of Life: 以下、QOL)をいかに維持・向上させるかを常に熟考しなければならない。

第1章 序論

本研究の目的は、在宅ケアサービス利用場面において、セラピストによる継続的な在宅支援が老年期のクライアントの QOL にどのような影響を及ぼすのかを検証することである。また、その結果を踏まえて、高齢者が幸せを感じながら暮らしていけるケアの在り方を探索した。さらに、Breggin が提唱する「共感的理解」を中核とする治療

関係が、クライアントとセラピストとの間に確立される時、クライアントの QOL が維持・向上されるのではないかと、この観点から検討をおこなった。

論文は、主に 5 つの章で構成されている。第 1 章では、本研究の意義、構成を述べ、先行研究の概観、本研究の基礎となる理論的枠組み、及び本研究の位置づけ等について論じた。本研究の基礎となる理論的枠組みとしては、Breggin の治療理論を踏まえたうえで、「在宅ケア」「高齢者の QOL」「クライアントの QOL を向上させるセラピー」の 3 点を中核とした。

第 2 章 在宅ケアサービス利用開始時における高齢者の QOL

第 2 章では、在宅ケアサービスの利用を開始した時点における高齢者の QOL とそれに関連する要因を検討した。

在宅ケア利用開始時の 200 名（平均年齢 78.1±5.1 歳）を対象に、Lawton の主観的幸福感に関する PGC-MS（PGC モラールスケール）を引用した調査項目を設定し、調査を実施した。その結果、「治療経過」と「家族構成」が、高齢者の QOL に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、退院直後に在宅ケアを利用する場合のほうが、QOL が低いことも示唆された。

第 3 章 在宅ケアサービスを継続利用した高齢者の QOL

第 3 章では、高齢者の QOL が 1 年間でどの様に変化していくのかについて、2 段階に分けて調査を行った。

第 1 段階では、高齢者の QOL の変化と関連する要因について、第 2 章と同じ調査協力者（200 名）をケアの内容によりリハビリ群と看護・介護群の各 100 名に分類し、ADL（Activities of Daily Living）との関連性に焦点を当てて検証を行った。第 2 段階では、調査協力者 200 名のうち、在宅ケアサービスを 12 カ月間継続利用した 136 名（78.1±5.1 歳）に対して、個別的な QOL の変化の軌跡とそれに関連する個人の背景要因との関係を中心に検討した。

その結果、第 1 段階については、リハビリ群では、長期支援により QOL と ADL が向上し、看護・介護群では、ADL は 1 年間で低下し、QOL は有意な変化がみられなかった。また、第 2 段階では、個々の調査協力者の個別的な QOL の変化の軌跡を分析し、高値群、低値群、上昇群、わずかな上昇群、下降群の 5 つのパターンに分類されることが明らかになった。

第 4 章 在宅ケアサービスを利用する高齢者の QOL に変化をもたらす要因の分析

第 4 章では、在宅ケアを利用する高齢者について、NBM（Narrative-based Medicine：物語に基づく医療）の視点から、QOL の軌跡の背景的な要因を検討した。調査協力者は、第 3 章の第 2 段階からさらに絞り、29 名とした。調査方法は、面接法を用い、調査期間内に計 3 回（1 回 60 分）の面接が実施できた 14 名の語りを分析した。

その結果、「自尊感情が再建され自己効力感が発現していくプロセスの物語」「誰かがそばにいてくれることから生まれる安心感の物語」「自分自身に起こり得る全てのこと

への感謝と受容の物語」「自分自身の人生を再建できないことへの葛藤の物語」という4つの物語が生成された。これらの物語には、高齢クライアントの在宅ケアに対する心情が凝縮されている。クライアントのQOLは、1年間に多彩な変化を見せる。その変化の背景要因や心情に留意しながら在宅ケアを提供することが、QOLの向上につながる可能性が示唆された。

第5章 総括

第2章から第4章の研究を通じて、在宅ケアサービスを利用するクライアントについて、利用開始時の不安や葛藤、利用開始後の思いなどが明らかになった。また、Bregginが提唱する「共感概念」が、クライアントのQOLの維持・向上に重要な役割を担っていることが示唆された。

本研究は、関西地域在住の在宅ケアを利用する老年期のクライアントを対象としたが、本研究を精緻化するには、調査の期間の延長や調査対象の範囲の拡大が望ましく、今後の検討課題である。

審査結果の要旨

本研究の目的は、在宅ケアサービスにおいて援助者による継続的支援が老年期のクライアントのQOLの維持・向上に与える影響を検証することであった。この研究により、在宅ケアのあり方、高齢者はもとよりすべての人の福祉を考える一助となり得るものである。研究方法として、在宅ケアサービスを受療している老年期のクライアント200名に対して、PGCモラールスケールを用いて、横断的に現状を把握した上で1年間の縦断的な追跡調査を行い、その変化を量的に分析を行った上で、個別的な面接法を用いてクライアント自身の成長と援助者との関係性に焦点化した質的な分析を行っている。その結果、在宅ケア開始時のPGCモラールスケールスコアは健常老人よりも低スコアであり、その要因は病気の有無や身体機能の状態、治療経過、家族構成がスコアに影響をしていることが認められた。また、1年間の継続的支援の結果では、継続的なリハビリテーションを受けている群が看護・介護を継続的に受けている群に比べてPGCモラールスケールのスコアが有意に高く、看護・介護を受けている群のスコアは低下傾向であったが、リハビリテーションを受けている群は向上が認められた。また、14名のクライアントに対して、非構造化インタビューを行い、質的なトランスクリプト分析を行った結果、4つの物語が生成され老年期のクライアントの長期的なQOLの維持・向上には援助者の「共感的理解」が必要であることが抽出された。

本研究は、在宅ケアサービスを受けている老年期のクライアントに焦点をあて1年間という長期にわたっての研究であり、その中でリハビリテーションの有用性を検証した研究といえる。研究成果は、国際雑誌に5編、国内雑誌へ7編が報告され、在宅ケアサービス今後大きく貢献することが期待される。

よって、本論文は総合リハビリテーション学研究に貢献するところが大きく、審査委員は全員一致で博士（保健学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。